



中井陽子編著、大場美和子・寅丸真澄・増田将伸・
宮崎七湖・尹智鉉著

文献・インタビュー調査から学ぶ 会話データ分析の広がり と軌跡

研究から実践まで

ナカニシヤ出版、2017年発行、264p.

ISBN : 978-4-7795-1157-8

楊 秀娥

1. はじめに

本書の出発点は、編著者である中井陽子氏が行ってきた個人レベルの会話データ分析の「研究と実践の連携」をまとめた『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』（中井 2012）であるという。会話データ分析とは、談話レベルの会話データを分析対象とした研究の総称で、さまざまな研究分野（会話分析、談話分析、相互行為の社会言語学、語用分析など）、分析対象（談話構造、会話の現象、非言語行動、手話など）を包括的にとらえる枠組みである（中井 2012）。本書のタイトルからうかがえるように、本書は、会話データ分析を広く捉えるために、これまで日本国内外における会話データ分析がどのような社会的・歴史的変遷のもとで行われてきて、その研究成果がどのように社会に貢献してきたのか、その研究と実践の特徴を探ることを目指している。

編著者である中井陽子氏、著者である大場美和子氏、寅丸真澄氏、増田将伸氏、宮崎七湖氏、尹智鉉氏は、長年日本語教育などの第二言語教育に携わっており、会話データ分析の研究と実践を行ってきた教育者・研究者である。著者らは、これまでの会話データ分析の研究がどのように行われてきて、その研究成果がどのように教育現場に還元されてきているのかといった「研究と実践の連携」（中井 2012）のあり方に関心を持っていたという。このような背景のもとで調査が行われ、本書は執筆された。

本書は3部構成になっている。第1部では、歴史的な観点から日本国内外における会話データ分析の変遷、会話データ分析と教育現場の関係についてまとめられ、会話データ分析を活かした「研究と実践の連携」の必要性について論じられている。第1部を踏まえ、第2部では、日本国内、米国、豪州、韓国で刊行されている会話データ分析論文を調査した結果、第3部では、日本語教育の分野で会話データ分析を行っている著名な教育者・研究者12人を対象としたインタビュー調査の結果が示されている。

2. 本書の概要

2.1 第1部「会話データ分析を活かした『研究と実践の連携』」の概要

第1部は、3つの章から構成されており、会話データ分析の変遷をテーマにしている。まず、第1章では、日本国外の会話データ分析のはじまり、発展、近年の広がり、または、日本国内の年代別の会話データ分析の変遷、日本語学習者の増加と会話データ分析の変化がまとめられている。それにより、会話データ分析は、多様な研究分野・分析対象で行われてきており、人間のコミュニケーションの実態を解明するために有効な手法であることがわかる。第2章では、会話データ分析と教育現場の関係について述べられている。具体的には、外国語教授法の変遷と会話データ分析の関係、会話データ分析を活かした日本語教育実践、会話データ分析を活かした学習指導項目と教材開発という3つの面が取り上げられている。それにより、会話データ分析と教育実践は、お互いに影響しあいながら発展してきていることが見える。第3章では、「研究と実践の連携」の必要性が論じられている。本書は、一貫して中井（2012）を踏襲して、研究と実践を分離して行うのではなく、「研究と実践の連携」を緊密に行っていくべきであると主張している。その主張を踏まえ、「研究と実践の連携」とは何かについて、教育者・研究者による「研究と実践の連携」と、学習者による「研究と実践の連携」とに分けて詳細に述べている。

2.2 第2部「会話データ分析の変遷の文献調査」の概要

第2部は、4つの章から構成されており、文献調査の結果から会話データ分析の変遷を示している。4つの章では、それぞれ日本語教育が盛んな地域の中から日本国内（第4章）、米国（第5章）、豪州（第6章）、韓国（第7章）を選び、当該国で発行されている論集に対する分析結果をまとめている。各国の文献調査から、次の会話データ分析の変遷の特徴を明らかにしている。まず、どの国でも会話データ分析の論文数がおおよそ増えてきている。次に、概してどの年代も研究論文が実践研究論文より多く見られるものの、日本国内と韓国では実践研究論文が増えている傾向にある。また、日本国内、米国、韓国では、昔は母語場면을対象にする研究がほとんどだったが、時代を経るにつれ、接触場面、および、母語場面と接触場面を含む両場면을対象にする研究が増えてきた。それに対して、豪州のモナッシュ大学の教育者・研究者たちは、1980年代から一貫して接触場面の研究に徹してきている。そして、会話データの種類に関しては、初期の頃はメディア、作例が主流だったが、今では自然談話が主流になっている。最後に、目的別に見ると、日本国内と米国においては、1970年代までは研究還元型の論文が多く見られたが、それ以降、実践還元型の論文が増えてきている傾向が見られる。

2.3 第3部「会話データ分析を行う教育者・研究者へのインタビュー調査」の概要

第3部は、12の章から構成されており、12人の教育者・研究者のインタビューを紹介している。インタビュー協力者の12人は、主に日本国内、米国、豪州、韓国で会話データ分析を行い、「研究と実践の連携」を行ってきた著名な教育者・研究者である。本書で紹介された順で挙げると、北條淳子氏、南不二男氏、杉戸清樹氏、三牧陽子氏、文野峯子氏、

森純子氏、リンゼー四倉氏、大野剛氏、宮崎里司氏、韓美卿氏、任榮哲氏、櫻井恵子氏である。インタビュー調査の質問項目は、①研究をはじめたきっかけ、その後の発展、②研究と社会をつなげる試み、研究の社会的貢献についての考えと具体例、③今後の教育者・研究者へのアドバイスについてであった。12人の教育者・研究者の語りを通して、それぞれの時代に求められていた会話データ分析の研究分野や手法との出会い、その追求によって、新たな研究を生み出し、発展させ、社会に役立つ「研究と実践の連携」を行った様子、そして研究の知見を大学院生への教育などにより後進に伝える姿を見て取ることが出来る。

3. 本書の特色

本書を読んで感じられた大きな特色として、以下の5つの点について指摘したい。

第一に、本書は、会話データ分析研究についての研究であり、会話データ分析を俯瞰的にとらえるメタ的な研究である。第1部では、日本国内外における会話データ分析の変遷を踏まえ、会話データ分析と教育の関係を論じ、「研究と実践の連携」の必要性を主張している。そのうえで、第2部の文献調査、第3部のインタビュー調査を展開している。会話データ分析を俯瞰する第2部の文献調査は、これまでになかった範囲と規模になっており、会話データ分析の特徴の変遷を整理している。第3部のインタビュー調査は、12人という規模はもちろん、研究者・教育者を対象としたインタビュー調査自体はこれまでにあまり見られない手法ではないだろうか。第1部を踏まえた第2部および第3部は、会話データ分析をメタ的にとらえる貴重な基礎資料と評価されよう。

第二に、本書は、文献調査とインタビュー調査の研究手法で、会話データ分析の広がりや軌跡を十分に見せることができている。第2部の文献調査は、日本国内で刊行されている『日本語教育』、『日本語教育論集』、『世界の日本語教育』、『社会言語科学』、米国で刊行されている『Japanese Language and Literatures』、韓国で刊行されている『日本語教育研究』の創刊号から2010年代前後までの論文、豪州モナッシュ大学関係者の会話データ分析論文を対象にしている。上記の文献は、日本語教育がかなり盛んに行われている国で刊行されており、会話データ分析の変遷を縦断的に反映させるに妥当な調査資料であろう。第2部では、会話データ分析の変遷の軌跡と広がりをうかがうことができる。第3部のインタビュー調査は、日本国内、米国、豪州、韓国などで会話データ分析を行ってきている12人の教育者・研究者を対象としている。一人ひとりの教育者・研究者の語りから、彼らの研究の軌跡、彼らがおかれた国の日本語教育の変遷、これからの会話データ分析の展望が見えてくる。12人の教育者・研究者のインタビュー調査は同時に12のケーススタディーでもあるため、12人の個別性ととともに、会話データ分析の共通するところ、会話データ分析に通底するところも垣間見ることができる。読者は、12のライフストーリーから、当該教育者・研究者の教育・研究の道、当該国、地域の日本語教育の変遷、個人が研究・社会の流れに乗って成長し、貢献していく軌跡を追体験することができる。それにより、読者は、自らの教育・研究を振り返り、自らがおかれている研究・社会の環境をとらえなおす機会も得ることができると言えよう。

第三に、本書は、「会話データ分析」といった包括的な視点で、会話データ分析の「研究

と実践の連携」のあり方を追求している。著者らは、中井（2012）を踏襲し、談話レベルで会話データが分析されているという共通点に積極的に着目し、これまで行われてきたの談話分析、会話分析などの研究分野、および、談話の構造、会話の現象、談話レベルの語彙・文法などの分析対象を「会話データ分析」という概念で新たにとらえなおしている。それによって、異なる研究分野や研究対象を統一的に見ることができたという。そのうえで、第2部の文献調査を通して、会話データ分析の活用の視点から、社会における会話の実態を把握するための知見の積み上げと理論の構築といった「研究還元型」研究の意義、研究成果をさまざまな実践現場に役立てるといった「実践還元型」研究の意義を述べている。さらに、第3部のインタビュー調査を通して、教育者・研究者による「研究と実践の連携」（p. 256 図1）、学習者による「研究と実践の連携」（p. 257 図2）のあり方を詳しく述べている。このように、本書は、膨大な文献調査とインタビュー調査に基づいて、会話データ分析の「研究と実践の連携」のあり方を追及しているのである。中井（2012）で提案した個人レベルの研究と実践に基づいた「研究と実践の連携」を検証し、拡大させていると言える。

第四に、本書は、会話データ分析をメタ的にとらえる研究書であると同時に、会話データ分析や日本語教育を実践するための教材にもなっている。本書の第2部、第3部の内容にそった質問項目が、ナカニシヤ出版ホームページ（www.nakanishiya.co.jp/book/b313405.html）に挙げてあり、本書を教材としてそのまま使えるようになっている。中井・高田（2017）は1つの実践例である。中井・高田（2017）は、日本語教育学の基礎を学ぶ大学院の授業でピア・リーディング活動の教材として、本書の第3部から3人の教育者・研究者の語りを読ませ、留学生受講生がどのようなことを学び、自身の研究と実践に活かそうとしているのか分析している。

第五に、本書は、研究書ではあるが、至る所で読者に配慮しており、会話データ分析の知識や経験がなくても読めるようになっている。第1部、第2部、第3部ごとに、その部の概要説明、まとめが書かれており、ここまでの内容とこれからの内容とのつながり、その部の本書における位置付けが把握しやすいようになっている。章ごとの冒頭にもその章のポイントが箇条書きで書かれ、章の内容をつかむのに助かる。そして、随所、脚注において文献が提示され、専門用語の解釈、補足説明などがなされている。いくつかの章の末尾に、「ちょっとひといき」というコラムがあり、著者らが関心を持っているテーマや自身の研究経験について気軽に語られている。これらの配慮から、会話データ分析の研究者・教育者としての著者らの丁寧さを感じさせる。

4. 本書の意義と展望

会話データ分析についてはもちろん、読者一人ひとりの研究領域について理解を深めるための方法論を示しているところに、本書の大きな意義があると考えられる。会話データ分析の社会的・歴史的変遷、研究成果の活用を明らかにするために、本書の著者陣は、膨大な文献調査、12人の教育者・研究者に対するインタビュー調査を行い、その結果をまとめていく。調査規模が大きいかかわらず、文献調査においても、インタビュー調査においても調査項目が一貫しており、読者に会話データ分析の全貌を見せることができた

思われる。読者は、本書を通して、会話データ分析の過去・現在・未来、そして会話データ分析の発展をもたらす社会的・研究史的な文脈を把握することができる。さらに、会話データ分析と深くかかわっている日本語教育、言語学の変遷についても理解することができる。また心理学、社会学などの隣接分野に触れることもできよう。このような俯瞰的な視点、研究手法を、読者各自の研究領域に引き付けられることも期待される。

そして、会話データ分析の「研究と実践の連携」のあり方の論述によって、会話データ分析研究の方向性が明確に示されたところに本書の重要な意義があると感じられる。本書は文献の中の事例、12人の教育者・研究者の事例から「研究と実践の連携」の実例を豊富に紹介している。会話データ分析を行っている者にとっては、会話データ分析の発展の軌跡とこれからの方向性が見えてくるだろう。会話データ分析をまだ行ったことがない者にとっても、会話データ分析という、人間のコミュニケーションを見るのに有効な手法を自らの研究に取り入れてみようというモチベーションにつながるかもしれない。会話データ分析でなくても、社会的貢献を求める各分野の研究者にとって、本書でまとめられている「研究と実践の連携」のあり方は、自らの研究がどのように社会貢献できるかを考える際のヒントにもなるだろう。

最後に、学習者による「研究と実践の連携」をさらに具体化させる点を今後の展望として述べたい。本書では、教育者・研究者による「研究と実践の連携」のあり方、学習者による「研究と実践の連携」のあり方をそれぞれ提示しているが、紙幅の多くを教育者・研究者による「研究と実践の連携」に関する記述に割いており、その実例を紹介している。学習者として会話データ分析をどのように利用できるか、会話データ分析で何をどのように学べるかについての言及は少なかった。学習者がどのように既存の会話データを活用し、どのように会話データを収集・利用するべきか、その具体的方法、そして意識すべき重要な分析視点を提示することで、学習者は会話データ分析に対する理解を深め、学習に活かすことが出来るのではないか。一方、学習者は会話データ分析の方法論を身に付けていれば、会話授業はもちろん、ピア・ラーニングなど学習者の主体性と強くかかわる授業にも効果的に参加し、教室外においても積極的にコミュニケーション力を向上させることにつながるだろう。したがって、学習者による会話データ分析の「研究と実践の連携」の具現化は、言語教育において発展性が大きいと考えられる。この点は、教育者・研究者による「研究と実践の連携」の一部である「教師自身の会話能力の向上のための会話データ分析の活用」に対しても共通して言えよう。これまでに会話データ分析の研究成果を公開したり、授業改善に活かしたりする活用法は注目を浴びてきているが、今後は、言語学習者・使用者自身に向けての活用法の開発も期待される。

参考文献

- 中井陽子 (2012) 『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』 ひつじ書房
中井陽子・高田光嗣 (2017) 「大学院での日本語教師養成における 「研究と実践の連携」 の意識化—ピア・リーディング活動を通じた留学生受講生の学び—」 『日本語教育研究』 40、pp. 63-81

(よう しゅうが 中山大学外国語学院)